

# なぜいまプロが必要なのか

Professionalism and Ethics

(学)工学院大学 大橋 秀雄

OHASHI HIDEO

## 1. 9月11日の衝撃

近代建築の象徴である二つの巨大ビルが、近代技術の象徴である2機のジェット機によって瓦礫と化す。9月11日の惨劇は、人々にそれぞれの衝撃を与えた。人工物対人工物の壊し合いは、何も目新しいものではない。近代戦争がまさにそれであり、現にイラクから日々送られてくる映像は、壊し合いの連続である。しかしこれまでの壊し合いは、国家対国家の名において行われていた。私にとっての9月11日は、国家対個人の壊し合いが始まる忌まわしき時代の予告であった。

現在我々が近くの量販店で買ってくるパソコンの能力は、20年ほど前の国家最強のスーパーコンピュータに匹敵するといわれている。科学技術の市場浸透力が極めて高い今日、20年も待てば、個人でもかつての国家並の能力を獲得できる時代がやってきた。その能力が悪意をもって発揮されたとき、サイバーステムの崩壊、構造物の破壊、ひいては直接人命への攻撃など、社会の安全を根本から揺さぶる脅威となる。

科学技術はこれまで、それがもたらす負の帰結に対する激しい批判と攻撃にさらされてきた。公害、薬害、環境破壊など、その例は数え切れない。しかし、負の帰結を解消するのも、これまた科学技術であるという論理で、その批判と攻撃を乗り切ってきた。しかし、悪意による意図的な科学技術の濫用を、科学技術だけによって抑えきれぬのか？9月11日は、科学技術に携わるものすべてに、新しい挑戦を突きつけてきたといえる。科学技術の行き先がスターウオーズの世界であるとすれば、悲しい未来である。

## 2. 技術者倫理とプロフェッション

かつては、人命に対する最大の脅威は病気や自然災害であり、健康のプロである医師が命を預かってきた。しかし人工環境の中に生きる現代人にとって、健康が続く限り、命を預かるのは人工物の信頼性・安全性である。人工物のプロとしての技術者の責任は医師並に大きい。医師には、ヒポクラテスの誓いに象徴されるように、ギリシャの時代からプロとしての倫理が根付いてきた。しかし誕生してから三百年にも満たない技術者、患者と直接向かい合う医師に比べると最終消費者・利用者との距離が遙かに長く複雑な技術者にとって、倫理は基本問題としては理解できても、現実には複雑な応用問題で満ち溢れている。

個人は、基本的に自らの考えと判断に従って行動する。組織の一員として行動することが多い技術者でも、基本は自立した個人としての判断にかかっている。しかし、現実には遭遇する複雑な問題に倫理を当てはめるとき、個人が正しく判断できる限界を超えることが多い。

医師が、基本的な医師倫理に加え、高度な専門的判断を要する部分については、所属する学会の倫理要項や基準を守る理由がここにある。これによって、医師全体が社会に明示された約束を守ることになり、プロ集団としての医師に対する信頼感を高めることができる。連帯による縛りを通じて集団としての信頼を高める。そこにプロの真の存在価値がある。

プロとは、「社会が必要とする特定の業務に関して、高度な知的訓練と技能に基づいて独占的なサービスを提供するとともに、独自の倫理規定に基づいた自律機能を備えている職業」と定義される。現代における技術者は、単なる利便の提供者を超えて、社会が必要とする業務を担っている。まさに現代社会が必要とするプロである。技術者を Professional として位置づけ、それぞれが連帯による縛りの中で行動を律しながら、技術に対する社会の信頼を高めてゆかねばならない。プロとしての縛りは、技術士のような資格の責務と連動させることが最も確実であるが、独自の倫理規定をもつ学会の会員であることも立派な縛りである。

技術者をプロとして社会に根付かせるためには、基礎教育から始まり、実務修習、資格取得、そして継続能力開発 Continuing Professional Development(CPD)に至る一貫したキャリア支援システムを築き上げることが求められている。幸いに最上流の基礎教育については、JABEE によって具体的な行動が始まった。これからは、下流側に向けて基盤作りを広げることが求められている。